

## 地域情報（県別）

## 数百人の医師と会った経営者が考える「いい医者」の3箇条－大型クリニックを展開する「めぐみ会」の田村豊理事長に聞く ◆Vol.3

2019年4月10日 (水)配信 m3.com地域版

都内に10のクリニックを展開する医療法人社団「めぐみ会」の田村豊理事長は在籍する医師158人を含め、今までに多くの医師と会ってきた。田村理事長が言う「いい医師」とはどんな医師なのか。また、自身が掲げる、患者に安心感を与えられる診療に必要な3箇条とは。取材ではコストパフォーマンスを重視する医師が増え過ぎることへの懸念も漏れた。（2019年2月5日にインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら

——「いい医師を採用して長く勤めてもらうこと」が大型クリニックを運営する上では重要とのことですが、先生が思う「いい医師」の条件とは。

スキルが確かで、コミュニケーション力の高い医師ですね。確かなスキルを持つためには日々研さんを積むことが必要で、医療に向き合う医師としての真面目さが問われます。一方、コミュニケーション力というのは患者さんと単に意思疎通を図れるということではなく、患者さんに安心感を与えられる接し方を意味します。「この先生と話していると安心するな」「この人と会うだけで何だか落ち着いてくる…」と患者さんが思えるかどうか重要。

めぐみ会という組織にとっての「いい医師」もこれらとニアリーイコールですが、コミュニケーション力の対象が患者さんだけでなく、職員にも発揮されることが大切です。つまり、スタッフが「この先生だと働きやすいな、ついつい頑張っちゃうな」と思えるといい。疲れていたり患者さんから嫌なことを言われたりしても、「この先生と一緒にだと何だか仕事が楽しくなる」とスタッフが思えるほどのオーラがあると理想的です。職員は患者さん以上に医師のスキルを見抜くので、医師はやはり職員にも一目置かれる、尊敬される存在であるべきでしょう。



田村豊理事長

——患者にどんな風に接すれば安心感を与えられると思いますか？

僕なりの3箇条があります。「1に気にかけて、2に一步踏み込み、3に我が事のように喜ぶ」です。まず1の「気にかけて」は、患者さんの話に耳を傾けてきちんと受け入れ、「よくわかります。僕もそんな気持ちになったことがありますよ」と共感すること。ここでのポイントは、患者さんにとって自分と共有してくれる世界が広いほど安心感を持ちやすい点です。患者さんの悩みだけではなく、仕事のこと、生活のこと、ご家族のことまで気にかけていいでしょう。

2番目の「一步踏み込む」というのは、医学的な判断を求められたときに逃げず、自分の意見をしっかりと伝えることです。近年、患者からのクレームを恐れて自分の意見を言わない医師が増えているように思うので、これは特に今、僕が大切だと思うことです。例えば薬を選ぶときにAとBそれぞれの薬について副作用を含めて説明し、「どうしますか？」と言って終わってしまうことがあります。そんな風に投げられても医療に詳しくない患者さんが決められるわけがありませんし、「決めたのはあなたですよ」と医師が自己防衛しようとしているのではと患者さんが勘ぐってしまうこともある。実際、医師側にそんな意図が含まれていることもあるでしょう。

僕であれば薬の説明をした上で、「僕の家族が患者だったら」と親身に考えていることを伝え、「こちらを勧めます」と結論を出します。もちろん熟慮した上ですが、仮にそれで思ったような結果にならなくても、患者さんは「この先生は自分に向き合ってくれている」と思ってくれることが多く、恨まれはしないものです。

最後の「我が事のように喜ぶ」は文字通りの意味ですね。3箇条の1と2をもって接していれば自然と表れるものでしょう。例えば、「息子が大学受験に受かったんです」と言われたら「ああ、それは良かった。ほっとしました。気になっていたんですよ」と笑顔で応じる、といったことです。3箇条を通して接していけば、「毎月、先生に会うのが楽しみ」とまで言ってくれるような患者さんが増えていきます。

——患者からのクレームを恐れる医師が増えているのでは、とのことですが、他に医師の変化という点で感じることはありますか。

僕は毎年40～50人の医師の採用面談を行っているので、かなり多くの医師に会ってきた方だと思います。その中で感じているのは、コストパフォーマンスを重視する医師が増えていることです。

医師は民間企業の社員に比べて圧倒的に時給が高いですから、そこを拠り所に「短時間でそこそこ稼げればいい」といった意識の人が目立つようになりました。「患者さんのために」という思いよりも、食いつばくれる心配がなく世間体がいい、定年もないという要素に魅かれる人が増えている印象を受けています。

こういった医師の増加は働き方改革も影響しているでしょう。確かに大病院などにおける医師の過重労働は問題だと僕も思いますが、「土日祝日は絶対に働かない」「診療は6時まで」と割り切った医師が増えているのは患者さんのことを考えるとどうなのか。

僕は経営者ですから、短時間勤務を希望されてもいい医師であれば妥協点を見出せないか話し合います。しかし、医師は人の命に関わる職業ですから、あまりにコスパを重視するのは問題だと考えています。僕は会社員を経験して医師になりましたから強く感じていますが、医師の仕事には基礎研究から臨床、教育など、本当にさまざまな可能性がある。医師にはぜひ、自分の仕事の中に夢や生きざまを重ねてほしいと思います。

——最後に、法人として取り組みたいことがあればお聞かせください。

医師以外の職員の待遇改善ですね。医療の世界は医師を頂点にヒエラルキーがあると言われますが、僕は民間出身だからこそ、医師以外のスタッフが誇りを持てる環境にしたいと考えています。役割ではなく、存在感としての差別・被差別意識を従業員には抱いてほしくないんです。めぐみ会に在籍する医師は平均して年収2千万円の収入を得ていて、多い人は3千万円を超えます。一方の事務スタッフは均すと民間の平均に留まります。

医師だけが高い給料をもらう構造を問題視しているので、法人として一層の成長を果たし、従業員にもさらに還元していきたいと考えています。

#### ◆田村 豊（たむら ゆたか）氏

1956年静岡県生まれ。80年に京都大学法学部を卒業後、旧日本石油（現JXTGホールディングス）で2年間の会社員生活を送った後、岐阜大学医学部に入学。89年に同大を卒業後、徳洲会病院、国立がん研究センター、三井記念病院などで主に消化器内科の診療に従事。94年に多摩市で開業し、「患者にとって身近で専門性の高い医療機関を作りたい」と大型クリニックを展開、現在、都内に10のクリニックを構える。多摩市医師会長としても活動する。

取材・文=医療ライター 庄部勇太

記事検索

ニュース・医療維新を検索

